二宮先生を送る

小林俊一（物理学教室）

二宮先生は1958年に本学工学部物理工学専攻の博士課程を修了された後，物性研究所の神前研究室の助手になられ，イオン結晶の格子欠陥を中心とした研究を行われた。1961年から二年間をイリノイ大学で過ごされ，格子欠陥，特に半導体中の転位の運動についての仕事をなされた。先生のお話によれば，この時期はまだ日米の落差が大きく，アメリカ人は自信に満ち，外国人に大いに寛容であり，先生ご夫婦は滞在を十分に楽しまれたという。1963年に帰国と同時に本理学部物理学教室に助教授として着任され，1981年に教授になられた。その間，乱れた系という柱を中心に，ⅢⅤ族半導体の結晶転位，アモルファス，準結晶などの研究をなされ，多大の成果をあげてこられた。物理学教室のご滞在期間は28年に亙る。

先生のご研究の特徴は，内容もさることながら，そのスタイルにあるといってよいだろう。理論家と実験家の分業が物理に定着して久しいが，先生はその両方をほとんど等しいウエイトでこなされる，数少ない研究者のお一人である。

学問の面以外にも，シンガポール大学との国際交流の委員，低温センター長，物理学専攻主任，物性研運営協議員などの学内の要職，物理学会欧文誌の編集委員長などを歴任され，幾つかの重要な国際会議の組織委員を務められた。物理学教室の中では，部屋割り係りを永年担当され，ともすればもめごとの種になる陣取りをその温厚なお人柄でまるく収めて下さった。まとめ役の才は，教室のレーザー利用者たちの相談役としても十分に発揮なされた。

先生は温厚であられる上に，大変上品な紳士であられ，決してそのご専攻の「乱れ」をお見せにならない。お酒にしても大変静かで上品である。私と先生とのお付き合いは，物理の上というよりも帰りのお茶の水への途中の赤ちょうちんのほうが多かった。私の不平や愚痴や悪口などを，飲みながら静かに聞いて頂くチャンスがなくなるのは，私にとって大変悲しい事である。

この一文を書くのに先生にあらためてご趣味をうかがった。落語（お部屋が黒札のまま行方不明になられることがままあったが，上野鈴本方面ではなかったかと疑っている）とお酒はもとより承知していたが，日本古代史の本とおっしゃったのにはちょっとびっくりした。戦前の教育で嘘を教えられたのを取り戻すためとお聞きして，そのまじめさに改めて感心させられた。

ご退官後は中大理工で続けて研究と教育にお励みになると聞く。初孫の顔もご覧になった。新しいご出発を衷心よりお祝い申し上げたい。